

---

# へそ曲がり笑子さんッ！

ざしきのわらし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

へそ曲がり笑子さんッ！

### 【Zマーク】

Z2552C

### 【作者名】

ぞしきのわらじ

### 【あらすじ】

私、“皆心笑子”は（自称）天才カウンセラー。私に答えられない相談なんてこの世にないッ！　なんて、思っていたら……

こんにちは。

私は（自称）天才カウンセラー……

“皆心 真子”よッ！

え？何その“ありきたりだなあ”って言う田は。これは私が丸三日間寝ずに（昼寝は含まない）考えた、素晴らしいペンネームなのよ？

まあそんなペンネーム（関係ない）と、実力（自称）のおかげで児童電話相談室『一人で悩まず117』が守られている訳で。

とりあえず語尾の番号が“天気予報”なのは軽く突っ込んで頂戴。じゃあ本来は守秘義務で相談者の話はしちゃいけないんだけど、今日は特別。

次から語る話は、つい1・99999……以下略分前の出来事でした。

局内に鳴り響く、一本の電話。  
とりあえず他の人も忙しそうだったからこゝは私が出たわ。

「ハイ。こちら『一人で悩まず117相談室』です。ついでに私、“皆心 真子”なのに皆の泣き顔大好きな美人カウンセラーであります」

『あ、あの……』

軽く流したわね、こいつ。

声は男の子。まだ声変わりしていないみたい。

『相談つて、なんでもいいんですか？』

この言葉に私はくすりと笑う。  
なんて愚問なのかしら。

「ええ、もちろん。イジメ被害の相談からイジメの仕方まで。勉強の悩み事から先生からテストの答案用紙を盗むまで。そういう学校の怪談を上手く使った自己防衛や……」

『じゃ、じゃあ……それやべ』

まだ話終わってないんだけど。  
でも良いわ。天才カウンセラーは心が広いのよッ！

『あの、実は僕……今お金が無くて』

……は？

何その不景気な世間なら誰もが悩みそうな相談は。  
でも男の子は続ける。

『友達も、家族も言ったのに力を貸してくれなくて

「ふうん。でも周りに言つたなら良いじゃない。んで皆はなんて  
？」

『“お前の手でやるから意味がある”って』

なんじゃそら。

自分の力で何とかしりつて意味？

てか小学生（声的）に、金の問題はどうじょひも無いこと思ひなごど。

『でも、僕にはどうしたら良いのか……分からなくて』

「今までの会話を聞いてるとまさにフリーターの門出ね」

『だから、その。“皆殺し 傷子”さんに『相談を……』

「私は“皆心 笑子”よッ！嫌がらせか！？」

『“人”を殺すべきか、殺さぬべきか』

一瞬の間があぐ。

え。何それ……。

暫く言葉を失っていた私だけど、ハツと我に帰る。

「い、今。なんて……」

『だから、“人”を殺すべきか、殺さぬべきか。です』

え、聞き間違いがじゃなかつたああ！

「や、止めるんだッ林！君の未来はまだ消えてないぞッ」

つて、何言つてんの私！？

林つて誰！？

てか、火サスの自殺を止める人みたいな口調になつとるツツ

「き、君。ほほほ本氣……？」

『本氣といふか勇気が無くて。僕には、その人の頭をかなづちでかち割る一歩がなかなか……』

小学生にして火サスの裏主人公かよッ！

てか、そんな勇気は要らんよ。

絶対要らんよ。

『偶然を装つて、窓から突き落とすか。はたまた誰かに依頼するか……どうがいいでしょう？』

しかも殺し屋にまで手を出すつもりかあー！？

まだ十代じゃにして未来を捨てるの早くないかあー！？

ここの天才カウンセラー“皆心 笑子”の実力で止めなくちゃやッツ！

「待ちなさい。殺し屋なんて頼むもんじゃないわ……。お、お金は凄いかかるし。下手すると口封じとか言つて殺されるわよ

そして私は止める所が違あああう！

私の馬鹿あッ。

『そ、そつなんですかッ！』

何気なく食い付くな小学生。

私も小学生の頃は良く陰湿なイジメをしてたけど……さすがに殺し屋までは。

「で、でも、君がそんな事したら大切な物を失うわ」「うわあ。久しぶりにカウンセラーらしい事言つた……。いつも皆をけなして楽しんでたからな。

「例えば、権力とか、地位とか、財産とか」

すみません。

私には愛とか家族とか言う口はなかつた事を忘れていたわ。でも小学生は、少し黙り込む。

『財産は、これ以上失いたくないです。……でも、その人を殺してお金入手に入れないと。僕、お姉ちゃんに喜んで貰えない』

「え？」

『僕、お姉ちゃんの喜ぶ顔が見たいんだ……』

喜ぶ顔が見たい、ですって？

「せつせと……それ、言いなさいよ」

私は少し声を荒げた。

何か知らんが怒つていた。

カルシウム不足？

「あんたの姉さんがどんな人かも知らないけどねッ人を殺して得了  
お金が欲しいなんて思う奴なんていると思つてんのか！そんな事す  
るくらいならこつこつ働いて、どんなに時間がかかるつても自分を信  
じなさいッ！それくらい、出来るでしょ……」

私格好よくなッ！

自画自賛しちまうぜ。

小学生は暫く黙り、やがて小さく『うん』と言つた。あの怒号  
が撃沈してたら天才カウンセラーとして失格よね。

『そつかあ。そうだね……そうだよね』

「そつよッ。あんたはまだ若いんだからもつと良い方法がきつと見  
つかるわ」

『うん。僕、お姉ちゃんにプレゼント買おうつて思つたけど遊びに  
言つて来るねッ』

「うん。お金なんかよりも逢つて話した方が何倍も大切なんだから。  
ゆつくり話してらっしゃい」

何か凄い充実感だわ。

『ひつして“皆心 玄子”は、一つの命を救つた訳で……

『ありがとう。“皆殺し 傷子”さん…』

「私は“皆心 玄子”だつつてんだろうがあああツツツ…」

つ、疲れたわ……。

今までいろいろな相談を受けて來たけど、まさか殺しの相談なんて。

まあ天才力カウンセラー“皆心 玲子”のおかげで、殺人事件は防げたし、一軒落着かしら。

早く帰りたいよお。

「……あれ」

アパートの前まで辿り着いた私の足が止まる。

階段の所 段差に腰を掛けでじっとゲームをしている小さな人影がそこにはあった。

まさに小学生くらいで、背中にはリュックを背負っている。

私は動けない。

何か知らないけど動けなかつた。

「じゅん、や……？」

やつとの事で私は喉から声を振り絞る。

“じゅんや”と呼ばれた小学生は、聽こえるはずのない声を受け取り、ムチの如く頭を上げる。

「お姉ちゃんッ」

“じゅんや”は、そう私を呼んだ。

そしてゲームを投げ飛ばし、こちらへ駆けて来る。

分からぬ。

何故彼がここにいるのか。

“お姉ちゃん”お帰りなさいっお仕事疲れたら？

「そ、そりじゃなくて……」

何であんたがここにいるのよ。

私は田舎から都会へ一人で出てきたの。

それなのに何で、何で……。

「今日はお姉ちゃんのお誕生日だよッ」

「えつ」

「だから僕、プレゼント買って送るつと思つたけど……カウンセラーの人が“逢つて話した方が何倍も良い”って言つてたから

「まさか……」

私は思わずハッとした。

一年以上も逢つてないせいか弟の声さも忘れていたのだ。

現に目の前で話すじゅんやの声と、あの昼間の小学生の声は見事に一致している。

「で、でもじゅんや。あんた誰かを殺すとか……」

「そうよ。

これは、流しちゃ行けない疑問よ。

「あつそつか。お姉ちゃんも“皆殺し 傷子”さんと一緒に働いているんだよねツ」

“皆心 紗子”です。  
いい加減にしろや。

「うん。貯金箱を割る、勇気が無くて……」

ほんのり頬を赤く染める弟。

え。貯金箱？

「前に夏休みの貯金箱コンクールで銀賞を取った時、景品で“会長をモテルとした貯金箱”を貰つて使ってたんだけど……。今回のお誕生日でお金を取りだそうと思つたら陶器製で割るしか取り出せなくて」

え、じゃあなんすか。

その会長モテルという“人型の貯金箱”を割る為に電話して、私が勝手に誤解して、私の弟に私の所へ行けとアドバイス……

ああもうツ！

何か分からんけど頭痛くなつて来てか、貯金箱の会長死ねツツ！

「……お姉ちゃん、迷惑だった？いきなり来て、ごめんね」

じゅんやが不安そうに私を見てきた。  
別に迷惑じゃない。

だつて。この一年ずっと一人だつた。  
だから。むしろ、私は……

「んな、訳ないじゃない……。たあ、早く部屋に入つて、飯食べよ  
うつか？」

「わあいッ僕ケーキ食べるうー。」

「はいはい」

私はじゅんやの背中を押し、顔を無理矢理上に上げる。  
熱い目頭から涙が溢れないように。

不覚にも“カウンセラー・皆心 玲子”に感謝してしまった瞬間  
だつた。確かに私は不器用で、飾りつゝ氣のあるよつたな上辺の言葉  
で相手を慰められないかも知れない。

だけど私はこの仕事を続けようと思つ。  
少しでもこの感情を皆に分ける為に。  
少しつと。  
少しつと……。  
少しつと……。

「あ、そういう。“皆殺し 傷子”さんにお礼言つておいでえー。」

やつぱ、止めた。



(後書き)

「J愛読、ありがとうございます。  
ちなみにすべて真相を知った上で、『じゅんや』の電話相談を見ると面白いかも。  
ではJ感想お待ちしております……。  
ぎりしきのわらし

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2552c/>

---

へそ曲がり笑子さんッ！

2010年10月9日02時30分発行